

## 上海のセファルディ系ユダヤ人

阿部, 吉雄  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5609>

---

出版情報 : 言語文化論究. 20, pp.41-53, 2005-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン :  
権利関係 :

## 上海のセファルディ系ユダヤ人

阿 部 吉 雄

アヘン戦争（1940-1942）後の南京条約（1942）を始めとする不平等条約<sup>註1</sup>によりイギリス・アメリカ・フランスに対し開港された中国の上海には、中華人民共和国成立（1949）まで1世紀以上に渡ってバグダッド出身のユダヤ人のコミュニティが存在した。彼らは最も多い時でも800人以下だったと推測されている。1930年代世界第5の大都市だった上海（1934年時点の人口は350万人）には46ヵ国からの外国人が住んでいたが、その数は10万人に満たなかった。<sup>註2</sup>（イギリス租界とアメリカ租界が1863年に合併した）共同租界やフランス租界でさえ住民の大多数が中国人である上海において外国人は少数派であり、その外国人の中でもバグダッド出身のユダヤ人は少数派だった。またロシア革命による内戦やポグロム（反ユダヤ人暴動）を逃れたロシア系ユダヤ人4000人、ナチスドイツの迫害を逃れたドイツ・オーストリア・ポーランド系ユダヤ人1万8000人など後から上海に渡来するユダヤ人グループとの比較でも少数派である。しかしバグダッド出身ユダヤ人は「東洋のロスチャイルド」と呼ばれたSassoon、「スエズ以東で最も裕福」と噂されたHardoonを始めとする大富豪たちが上海経済をリードしただけでなく、コミュニティとして自らの同一性を守り続けた点でもその存在感は強いものがあった。本稿では少数派コミュニティという面から上海のバグダッド出身ユダヤ人について論じる。

### 前 史

クラズラーが指摘するように、東欧および中欧のユダヤ人が西方（イギリス・フランス・アメリカ）へ大量に移住していた19世紀、それより規模は小さいものの、バグダッドのユダヤ人が東方のインド・マレー半島・中国・日本へ移住した。両方向の移動とも移住先の地域の経済発展に大きく貢献することになる。<sup>註3</sup>

イスラム教国のオスマン帝国支配下のバグダッドに住むユダヤ人は「庇護民」となり迫害されず、規定の税金を払うことにより自らの信仰を許されたが、二流市民の扱いに甘んじていた。彼らは一般に商業・両替商・仲介業を営み、その指導者は地方政府の主任財務官に任じられた。しかし18世紀後半以降ユダヤ人に対する圧政が始まり、族長David Sassoon（1792-1864）は1829年バグダッドを離れ、バスラやペルシアのブシェルを経て1932年家族とともにインドのボンベイ（現在のムンバイ）に移住した。

Sassoon家に続いて多くのユダヤ人が政治的圧迫や宗教的迫害を避け、また徴兵を逃れるために、イギリス支配下で政情が安定しているインドのボンベイやカルカッタに移住した。その中には後に上海でもSassoonと並んでユダヤ人社会を指導するKadoorie・Abraham・Ezra・Solomon・Gubbayなどバグダッドの名家が含まれていた。

まもなく彼らはインドで生産される綿・ジュート（黄麻）・タバコの貿易仲介で財を成し、不

動産投機・紡績業・銀行業にも進出した。ユダヤ人たちにとって追い風になったのは1833年東インド会社の商業権が廃止されたことである。時あたかもイギリスの産業革命によりイギリスの綿織物をインドへ、インドのアヘンを中国へ、中国の銀や茶をイギリスへという三角貿易が始まり、ユダヤ人たちは貿易業で大きな利益を上げることができた。

この方面でもSassoon家は主導的な役割を果たした。ボンベイに移住したDavid SassoonはDavid Sassoon and Sons Co. (1832)を設立し、8人の息子たちをアジア各地に派遣し支店を開設させた。この家族主義的経営もロスチャイルドと比較される。次男Sir Elias David Sassoon (1820-1880)は南京条約締結後の1844年上海に着いた。彼は上海を訪れた最初のユダヤ人と言われている。彼自身は上海と同時に開港された広州で支店の経営に携わっていたが、南京条約でイギリスに割譲された香港が重要性を増すとそちらへ移り、1850年には中国との貿易をより大規模に行うのに適した上海に拠点を移した。David Sassoonの死(1864)後、David Sassoon and Sons Co.は長男のSir Albert-Abdullah David Sassoon (1818-1896)が引き継いだため、次男のSir Eliasは自らの会社Messrs. E. D. Sassoon and Co.を設立し、ボンベイと上海に事務所を置いた。以後インドでも中国でもこの2つのSassoon商會が競争しつつ繁栄する。

### 「セファルディ系」ユダヤ人

バグダッドを始めとするチグリス川とユーフラテス川に挟まれた地域は何世紀にも渡ってユダヤ文化と学問の中心地だった。そして「バグダッド系」ユダヤ人や「イラク系」ユダヤ人という名称はシリアやイエメンなどを含むオスマン帝国内のアラビア語を話すすべての地域のユダヤ人を示すようになった。さらにはペルシアやアフガニスタンなどアラビア語を話さない地域のユダヤ人さえそう呼ばれた。<sup>註4</sup>

上海のバグダッド系ユダヤ人にとってバグダッドの出身であるという集团的記憶は自らの同一性の中核をなす部分であり続けた。事業の従業員にはインドで訓練を受けたバグダッド出身のユダヤ人を雇用した。バグダッド風の服装やコミュニティの公用語としてのユダヤアラビア語は19世紀末までに放棄されたものの、家庭内では多くの習慣や伝統が維持された。特に宗教的儀礼は20世紀に入ってから基本的には変わらなかった。David Sassoonの長男Sir Albert-Abdullahの例が示すように、ファーストネームは音が似たイギリス名に変えられたが、バグダッド風の名字はそのままだった。

しかしこのように「バグダッド系」という同一性を重視していたにもかかわらず、彼らは自らを「上海のセファルディ系ユダヤ人コミュニティ」と呼んだ。「セファルディ系ユダヤ人」は一般に「スペイン・ポルトガル系ユダヤ人」と理解される。スペイン(1492)とポルトガル(1497)のユダヤ人追放により国外へ脱出したユダヤ人の中にはオスマン帝国に移住した者もいたが、彼らと上海のバグダッド出身ユダヤ人との関係は一般に指摘されていない。

スペインはイスラム文化の重要な中心地の1つであったため、中世期にイスラム文化地域に住んでいたユダヤ人は「セファルディ系」と呼ばれた。さらにその後すべての非アシケナージ系ユダヤ人を示すようになった。アシケナージ系ユダヤ人とはキリスト教文化地域である西欧・北欧・東欧に住むユダヤ人を指す。

それゆえバグダッド出身のユダヤ人は「バグダッド系」(「イラク系」)と「セファルディ系」のいずれを名乗ることも可能だったが、彼らが後者を選んだ理由に関するメイヤーの考察は非常

に興味深く、かつ説得力がある。<sup>15</sup>メイヤーが注目するのは「セファルディ系」という名称が本来持つヨーロッパ的意味合い（「スペイン・ポルトガル系ユダヤ人」）である。イギリス支配下のインドではヨーロッパ人の給与水準は現地人より高く、ビジネスチャンスも大きかった。早くからインドに定住しコミュニティを形成していたコーチンユダヤ人やベネイスラエルと血縁的に近かったとすればなおさら、バグダッド出身のユダヤ人が自らをボンベイでは「アラビアの商人、ボンベイの住人」と呼び、ヨーロッパ人ではないものの民族学的には白人であってヨーロッパ人と同様に外国人であると主張し、土着化した両ユダヤ人コミュニティと一線を画そうとしたのもうなずける。また上海では「セファルディ系」を名乗り、暗黙のうちにヨーロッパ人として分類されることを選んだ。

### イギリスへの忠誠

バグダッド出身のユダヤ人がインドで土着化したユダヤ人コミュニティとの通婚を避け、またインドの文化や宗教の影響を受けなかったのは、自らの同一性を保持するためでもあったろうが、主な理由は上記のようにイギリス植民地においてヨーロッパ人、特にイギリス人に近い存在であることが重要であるという政治的判断が働いたためと考えられる。彼らのうちの裕福な者たちはイギリス国籍を取得し、イギリスへの強い愛国心を抱いた。

この愛国心の最大の理由はイギリスがアヘン貿易を保護したことにある。イギリス人商人とパルシー教徒<sup>16</sup>がアヘン貿易から徐々に撤退したため、19世紀の最後の四半世紀はユダヤ人がほぼ独占する状態だった。イギリス国籍を持っていれば治外法権に守られ中国国内を自由に旅することができ、また太平洋戦争が始まる（1941）まで上海の共同租界の主導権はイギリスの手中にあった。イギリスにとってもアヘン貿易からの歳入がインドの植民地経営を安定させただけでなく、ユダヤ人が上海に進出し租界や港湾の開発を進めたことは、中国においてイギリスが他の列強と勢力争いを続ける上で都合良かった。

20世紀に入りユダヤ人がアヘン貿易から他の事業へ移行した後も、彼らはイギリス人と同一視されることを最重要視した。1919年上海のセファルディ系ユダヤ人コミュニティは新任のラビをバグダッドから呼ばず、イギリスの主席ラビDr. Hertzに適任者を推薦してくれるよう依頼する。第1次世界大戦後、ユダヤ教における影響力が衰えたバグダッドは精神的中心地の座をエルサレムに譲っていた。1920年に着任したラビW. Hirschはセファルディ系ではなくアシュケナージ系のラビだった。

20世紀に入ると彼らの出自を示すユダヤアラビア語に代わり英語がコミュニティの公用語となり<sup>17</sup>、服装はバグダッド風から西洋風になった。戒律で定められた成人男子の宗教的義務であった鬚も生やさなくなった。ある程度裕福な者は子供を外国人用のパブリックスクールに通わせた。しかし上海の外国人社会、特にイギリス人社会に受け入れられるためにユダヤ人が行った文化的変容は、その最も裕福な者たちにおいてさえ、18～19世紀のイギリスにおいて（真正の）セファルディ系ユダヤ人がイギリス社会の支配層への完全な統合を目指して行ったキリスト教への改宗やユダヤ人コミュニティからの離脱という現象<sup>18</sup>にまでは至らなかった。これは経済的利益が最優先される租界において宗教の違いは重要でなかったこと、狭い租界の中でコミュニティから地理的に（例えば郊外に）離れることは難しかったこと、そして何よりもボンベイ・カルカタ・ラングーン・シンガポール・香港・オーストラリアなど東アジア各地のユダヤ人コミュニティのネットワークが彼らの商売の基礎になっていたからと考えられる。

イギリス人社会の側から見れば、イギリス国籍を持つ最も裕福なユダヤ人でさえ完全に受け入れはしなかった。サージェントによれば、晩餐会でSir Ellice Victor Sassoon (1881-1961, Sir Elias David Sassoonの孫) と同席したある女性は帰国ルートについて彼が話そうとした時、「あなたはラクダで行くのでしょうか。」と言い、その女性の友人も「ちょっと意地悪だったかもしれませんが、あの人にイギリスを故郷と呼ばせるわけにはいきません。とんでもないことですわ。」と語ったという。<sup>注9</sup>

しかし上海のイギリス人エリートの社交の中心だった上海クラブは1931年ボンベイから移って来たSir Victor Sassoonを迎え入れた。あるイギリス人は「Sir Victorはユダヤ人だったが、プリンス・オブ・ウェールズと一緒にゴルフをする男を冷たく扱うことなどできなかった。」と当時の状況を語った。<sup>注10</sup>ユーラジアンユラジアンの女性と結婚し、現地の文化である仏教に関心を抱き、孫文や溥儀を始めとする中国人政治家や軍閥と交際するなど租界のタブーを公然と破っていたSilas Aaron Hardoon (1851?-1931) でさえクラブの会員だった。ユダヤ人資本家の巨大な財力は租界において彼らをイギリス人の政治的パートナーに押し上げ、1869~1904年の間、共同租界の行政執行機関である工部局参事会の6~9議席のうち少なくとも1つを通例Sassoon商会の代表が占めていた。<sup>注11</sup>Silas Hardoonは1892~1901年フランス租界の公董局参事会のメンバーに、1900~1903年共同租界工部局参事会のメンバーに選ばれているが、これらの時期彼はSir Elias David Sassoonの長男Sir Jacob Elias Sassoon (1844-1916) が率いるMessrs. E. D. Sassoon and Co.の上海での共同経営者兼支店長だった。彼は1911年Messrs. E. D. Sassoon and Co.を辞めた後、自身の会社を設立し不動産王になる。

イギリス人エリートにとって上海はイギリスではなく、ビジネスの場に過ぎなかった。彼らは上海で数年間会社のためにがむしゃらに働き、キャリアと一財産を持って本国に戻るのだった。一方ユダヤ人たちは上海を終の棲家と決め、20世紀に入って中国における様々の戦乱で沿岸地域の貿易は順調でなかったにもかかわらず、不動産部門・工業部門・公益部門などでの投資を続け、上海の未来への確信を表明していた。

### コミュニティの性格

ボンベイの場合と同様、上海でもDavid Sassoon and Sons Co.はバグダッド出身のユダヤ人を従業員として雇った。彼らは商会がボンベイに作った学校で仕事に必要な英語・アラビア語・ヘブライ語・ヒンズー語の4か国語と地理・数学・会計学の無償教育を受けてから上海に送られ<sup>注12</sup>、商会でしばらく働いた後、多くが独立し小売店主・輸出入業者・不動産仲介業者・株式仲買人・両替商などになった。その中には上述のSilas Aaron Hardoon (彼はまずボンベイでDavid Sassoon and Sons Co.の学校で教育を受け、商会で働いた後、1860年代後半に香港でDavid Sassoonの末息子のFrederick (1853-1917) を補佐し、1874年上海に移ると家族経営のSassoon商会では異例の出世で支店長となり、1886年または1887年Messrs. E. D. Sassoon and Co.の支店長になった。) やSir Elly (Eleazar Silas) Kadoorie (1867-1944. 上海でSassoon商会の従業員として働いた後、独立して仲買人になる。1897年ロンドンでセファルディ系セファルディ系の名家Mocattaの娘と結婚した彼は、香港を経て上海に戻り、仲買人として大きな富を得る。) のように大きな成功を収め、Sassoonと並ぶ大富豪になった者もいる。

David Sassoon and Sons Co.が地縁・血縁関係のあるバグダッド出身のユダヤ人ばかりを雇用したのは、非常に忠誠心が強く信頼できる従業員を確保するためだが、毎日の祈りのために必要

な定足数を確保するという宗教的な理由もあった。商会の従業員は商用の旅行中もユダヤ教の戒律が定めるコシャーの食事が取れるように儀式に則った鶏の屠殺法を教えられた。1862年には商會がMohawk Roadにユダヤ人墓地を購入した。初期には安息日や祝祭日はいかなる仕事も行われなかった。従業員の側から見れば、戒律が毎週金曜日の晩と土曜日の労働をすべて禁じているため、他の雇用主の下で働くことは不可能だった。上海のセファルディ系ユダヤ人の多くが家族の事業に参加するか、他のセファルディ系ユダヤ人に雇用された。彼らは互いの近くに住み、宗教・仕事・社会生活において緊密な関係にあった。

この同族主義はバグダッド以来の族長主義とも言うことができ、商會構成員の強い忠誠心と結束を作り出す一方で、近代的な意味でのコミュニティの成立を阻害する要因になった。上海では1920年代に2つの美しいシナゴークが建てられたが、いずれも大富豪からの寄付によるものだった。<sup>注13</sup>そのうちの1つOhel Rachelシナゴークは上述のイギリスから招かれたラビHirschにより1920年聖別されたが、彼はコミュニティ全体が力を合わせて募金をした結果ではなく、裕福な慈善家の贈り物であることが不満だった。「個人が十分に貢献するよう求められず、彼が与える者でも受け取る者でもない所では（中略）シナゴークは決して、利害が交錯しコミュニティの魂が生まれるユダヤ人の生活の中心にならない。それは礼拝者が1人で祈りに来て、来た時と同様に幸福に自足してそこから帰っていく祈りの家であり続ける。人々はそこで自分の家にいる子供のようにではなく、他人の家にいる客として出会う。そこには人々の感情や思考を1つにまとめるような共通の関心も相互の責任もない。」<sup>注14</sup>

一握りの人々だけが裕福で、彼らはイギリス国籍を取得していたが、大多数はイラク国籍または無国籍のままであり、上海の外国人の中で貧しい階層に属した。そのような貧しいセファルディ系ユダヤ人たちは裕福な者がコミュニティのために寄付をするのを当然のこととみなした。それゆえSilas Aaron Hardoonが亡くなり（1931）、遺言状によって400万ポンドに上る遺産のすべてをユラジアン<sup>注15</sup>の妻が受け取り、自分たちのためには何ひとつ遺されていないことを知った時のコミュニティの憤激は大変なものだった。Hardoonは生前コミュニティのためにBeth Aharonシナゴークを寄贈していたが、その遺言について1932年ユダヤ系雑誌のIsrael's Messengerは、これは恐ろしい悲劇でありHardoonの「利己主義」の例を真似ようとする他の者たちへの戒めであると述べ、1936年には次のように結論づけた。「今日彼の名前がイラクや当地や他の場所で心に刻まれる代わりに、彼はほとんど忘れ去られている。」<sup>注15</sup>

## コミュニティ活動

コミュニティの生活はユダヤ教と深く結びついていた。誕生・バルミツツヴァ（男子13歳の成人式）・結婚・死亡の際の宗教的行事にはコミュニティ全体が関わり、そのつながりを再確認する機会になった。イギリス人にとっての上海クラブのように出身国ごとに作られた外国人クラブをバグダッド出身のユダヤ人は持たなかったため、一部の富豪を除き大部分が貧しい階層に属した彼らにとってシナゴークでの礼拝は盛装して知人と出会う数少ない社交の場だった。礼拝の後、子供たちは中庭で遊んだ。

Sassoon商會によるMohawk Road墓地の購入から25年後の1887年、コミュニティとして最初のシナゴークBeth Elを、既存の建物を賃借して開設した。1895年に175人だったバグダッド出身ユダヤ人の数は第1次大戦後には800人近くまで急増したため、Beth Elシナゴークの後継としてSir Jacob Elias Sassoonの遺産によりOhel Rachelシナゴーク（1920）が建てられた。1900年にはBeth

Elシナゴグの会衆からより正統派的な人々が分離し、やはり既存の建物を賃借してSheerith Israelシナゴグを開設した。Silas Aaron Hardoonが寄贈したBeth Aharonシナゴグ（1927）がその後継になった。

19世紀においてDavid Sassoon and Sons Co.を始めとする各商会は自らが雇用するユダヤ人たちを族長的に指導していたが、20世紀に入りバグダッド出身ユダヤ人が増えたため、1909年拡大したコミュニティの様々な事象を統括的に管理する組織として上海ユダヤ人コミュニティ協会（Shanghai Jewish Communal Association）が設立された。すでにあるMohawk Road墓地の他に、ロシア系ユダヤ人のコミュニティと共同でBaikal Road墓地、さらにColumbia Road墓地を取得し維持した。<sup>注16</sup>上海ユダヤ人コミュニティ協会はユダヤ教の戒律が求めるコシヤーの食事を通常の食事と同じ料金で提供した。協会はバグダッド出身ユダヤ人の誕生・結婚・死亡を公式に記録し、結婚や離婚には協会の承認が必要だった。

教育面では、裕福な者が子供を外国人（特にイギリス人）用のパブリックスクールに通わせた一方で、それが不可能な貧しい家庭の子弟のためには上海ユダヤ人学校（Shanghai Jewish School）が作られた。上海ユダヤ人学校の前身は1902年上述のSheerith Israelシナゴグに開校されたヘブライ語学校だった。最初はヘブライ語の授業と、ユダヤアラビア語による宗教の授業だったが、後にイギリスのカリキュラムを手本に英語による世俗教育・ユダヤ人の歴史と伝統・速記・タイプ・簿記の授業が行われ、ケンブリッジの入学試験が要求する教育水準にまで達した。

1927年に亡くなった慈善家のIsaac S. PerryとSir Elly Kadoorieの寄付により1931年上海ユダヤ人学校は広い土地と新しい校舎を得た。校長には1932年Ohel Rachelシナゴグのラビとしてロンドンから招聘されたMendel Brown尊師（1885-1949）が就任した。上海ユダヤ人学校にはセファルディ系ユダヤ人だけでなくロシア系ユダヤ人も通った。1938年の報告では240人いた生徒の多くは貧しい家庭の子弟であり、無料の給食も与えられた。<sup>注17</sup>後にドイツやオーストリアからのユダヤ人難民の子弟も受け入れたが、人数が多いため、難民が多く住む虹口地区に1942年上海ユダヤ人青年協会（Shanghai Jewish Youth Association。Sir Elly Kadoorieの息子のSir Horace Kadoorieが1937年設立。）学校、通称Kadoorie Schoolを作り600人の生徒を受け入れた。

コミュニティは公済医院（Shanghai General Hospital）と宏恩医院（Country Hospital）に貧しいユダヤ人のためのベッドを寄付した。しかしこれでは十分でなく、1934年上海聖喬社医院（B'nai B'rith Polyclinic）を設立した。B'nai B'rith Polyclinicは1942年上海ユダヤ人病院（Shanghai Jewish Hospital）に発展し、ドイツやオーストリアからの多くの難民医師を受け入れた。

### 開封のユダヤ人への関心

バグダッド出身のユダヤ人が上海に到着するはるか以前からユダヤ人は交易目的で中国を訪れていた。唐（618-907）の時代には多くの町でユダヤ人が活動していたが、彼らは一時的に滞在していたに過ぎなかった。しかし11世紀には北宋（960-1126）の首都開封に70家族500人からなる最初の定住ユダヤ人のコミュニティが成立した。明（1368-1644）の時代に500家族5000人に達し最盛期を迎えた開封のユダヤ人コミュニティの存在は、1601年明を訪れたイエズス会士Matteo Ricci（1552?-1610）の報告により初めて西欧に知らされた。1163年に建てられたシナゴグは1663年までに10回補修されたが、1462年と1642年の水害で経典の一部が失われ、1688年の大修理以降は手を入れられず、1851年の大水害で建物自体が破壊されてしまった。それ以前にラビが後継者のいないまま亡くなっていた。19世紀後半に開封を訪れた外国人宣教師によれば、他のユダ

ヤ人中心地から遠く離れていた上、漢民族が他民族に寛容であったため開封のユダヤ人は漢民族との通婚によりその人種的特徴を失い、彼らが信仰するユダヤ教の中にも儒教の影響が強く現れるに至ったという。<sup>注18</sup>

1864年ロンドンに開封のユダヤ人を救援するための協会が設立され、Sassoon David Sassoon (1832-1867, David Sassoonの三男) が会長になったことが直接の契機となり、このほとんど漢民族に同化されたコミュニティへの関心が上海のセファルディ系ユダヤ人の間に生じた。<sup>注19</sup>

1900年上海セファルディ系ユダヤ人の主だった人々はSassoon Jacob Solomon (1848-1922)<sup>注20</sup>を事務局長とする中国ユダヤ人救援協会 (The Society for the Rescue of the Chinese Jews) を設立した。彼らは開封のコミュニティに宛てて44名の連名でヘブライ語と中国語による書簡を送り、援助を申し出た。しかし開封のユダヤ人は当時50家族250人にまで減少し、ラビもシナゴグもヘブライ語の知識もなく、人種的にも宗教的にもコミュニティの命脈は尽きかけていた。義和団事変の影響で開封との連絡も円滑に進まず、結局具体的な成果としては8人の開封ユダヤ人を上海に呼び寄せ、ヘブライ語を教えて聖書が読めるようにするに止まった。1924年に再度組織された協会による救援の試みも成功しなかった。<sup>注21</sup>

通婚による人種的同化と現地文化(儒教)の影響によるユダヤ教信仰の変質および喪失が開封のユダヤ人コミュニティを消滅させた事実を目の当たりにし、上海のセファルディ系ユダヤ人が自らの同一性を保持する重要性を痛感したであろうことは想像に難くない。彼らは他のユダヤ人グループとの通婚さえ嫌い<sup>注22</sup>、血統を守るため従兄弟同士を含む近い親戚間の結婚もしばしば許可した。1930年代に入っても上海のロシア系ユダヤ人との結婚に反対していた。しかし20世紀に入り、David Sassoonが1829年バグダッドを離れてからすでに70年以上が経過し、第3・第4世代の時代になっていた。共通語がユダヤアラビア語から英語に代わったため祖父母の世代とのコミュニケーションに障害が生じていた上、言語以外の面でもイギリスへの文化変容は進んだ。イギリスへの同化の自信からであろうか、第1・第2世代ではタブーであった現地文化(例えば中国美術や医薬、そして中国語)への関心も現れていた。

### シオニズムへの態度

1897年スイスのバーゼルでTheodor Herzl (1860-1904) が主導し第1回シオニスト会議が開催されたことを受け、上海のセファルディ系ユダヤ人は1903年上海シオニスト協会 (Shanghai Zionist Association) を設立し、初代会長にEdward I. Ezraを選出した。ここでも彼らはイギリスとの連携を求め、ロンドンのイギリスシオニスト連盟 (English Zionist Federation) に対し同年バーゼルで開かれる第6回シオニスト会議に上海シオニスト協会を代表して出席するよう要請した。<sup>注23</sup> 英字紙Israel's Messenger (1904-1941) は最初M. Myersが編集者だったが、その後Nissim Ezra Benjamin Ezra (1880-1936) が引継ぎ、上海シオニスト協会の機関誌としての役割を果たした。

1917年イギリス政府外相がイギリスシオニスト連盟会長ロスチャイルド卿に宛てた書簡でパレスチナへのユダヤ人入植を認めた、いわゆるバルフォア宣言へのタイ・中国・日本の支持を取り付けるため、上海シオニスト協会会長Sir Elly Kadoorieと同事務局長Nissim Ezra Benjamin Ezraは精力的に活動し、タイ政府は1918年8月、中国政府と日本政府は同年12月Sir Elly Kadoorie宛てに文書でバルフォア宣言支持を表明した。さらに中国国民党を結成し(1919)当時フランス租界に住んでいた孫文にも接触し、1920年4月Nissim Ezra Benjamin Ezra宛てにシオニスト運動への支持を表明する書簡を得る。



これらは上海シオニスト協会が上げた最大の政治・外交的成果であるが、上海のセファルディ系ユダヤ人社会ではこの問題に対し反対する空気があったため、Sir Elly KadoorieとNissim Ezra Benjamin Ezraがほとんど独断で処理した。<sup>注24</sup>その理由としてパレスチナに元々いたセファルディ系ユダヤ人をシオニストが差別したことに対する不満<sup>注25</sup>、その後の歴史が示すようにパレスチナへのユダヤ人の大量入植はイギリスの利害と合致しないことへの配慮、より過激な修正シオニズムを上海のロシア系ユダヤ人が支持していたことへの懸念などが挙げられよう。1924年Sir Elly Kadoorieが火災で亡くなった妻を記念するためにパレスチナに田園都市を建設する計画を立てたのに対し、シオニスト基金Keren Hayesodはより優先度が高い資金の使い道があると反対し、シオニスト運動に世界で最も気前のよい寄付をしていた上海のセファルディ系ユダヤ人の支持を失ってしまった。<sup>注26</sup>

## 2度のユダヤ人難民の波

ロシア革命（1917）に伴う内戦やボグロムにより、多くのユダヤ人がロシアから極東経由でアメリカへ移住した。その中にはすでにロシア系ユダヤ人のコミュニティが存在していた北中国のハルビンや天津に住み着く者もあり、上海にも1000人が渡来した。満州事変でハルビンを占領した日本軍（1932）はユダヤ人の経済活動を圧迫した上、白系ロシア人によるユダヤ人迫害を黙認したため、さらに3000人のロシア系ユダヤ人が上海へ移住した。<sup>注27</sup>

上海のセファルディ系ユダヤ人はこの言葉も文化的習慣も異なる宗教的同胞が租界のタブーを破り、白人に相応しくないとされていた肉体労働に就いて外国人に対する中国人の評価を貶めてしまうことを心配した。またロシア系ユダヤ人の渡来はセファルディ系ユダヤ人にバグダッド出身という自らの同一性を強く意識させるとともに、それが転じてロシア系ユダヤ人に対する優越感も生じた。しかし彼らはロシア系ユダヤ人が自分たちのシナゴークを持つまでSheerith Israelシナゴークのいくつかの部屋を利用させ、貧しいロシア系ユダヤ人の子供たちを上海ユダヤ人学校に受け入れた。

水晶の夜事件（1938）を始めとするナチスドイツによる迫害を逃れたユダヤ人たち1万7000人が1938年末から1939年夏に上海へ逃れた。ロシア系ユダヤ人が移住した時に比べはるかに急激かつ大規模な流入であり、今回は本格的な支援が不可欠だった。1938年10月予想される難民の大量流入に備え、上海ヨーロッパユダヤ人支援委員会（Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai/CFA）が設立された。セファルディ系ユダヤ人は難民の支援だけでなく、日米関係が緊張の度を増す中、ユダヤ人難民の保護を切り札に対米交渉を行おうとする日本の上海海軍武官府犬塚惟重大佐らとの交渉もしなければならなかった。当時頻発していた中国人労働者のストライキへの対抗策として雇われたユダヤ人難民たちが中国人の仕事を奪ってその恨みを買うことが心配されたが、現実はそれ以上に悪く、売り食い、果ては物乞いをする姿さえ見られた。

1941年にはポーランド系ユダヤ人1000人が日本を経由して渡来した。その多くがリトアニアのカウナスで日本副領事杉原千畝から日本通過ビザを得てヨーロッパを脱出したMir Yeshiva（ユダヤ教の神学校）の神学生だった。上海における学習の場として彼らにBeth Aharonシナゴークが提供された。

ロシア系・ドイツ（およびオーストリア）系・ポーランド系ユダヤ人はいずれもアシュケナージ系だが、上海のセファルディ系ユダヤ人はドイツ系ユダヤ人に対する支援の 때가最も積極的

だった。セファルディ系ユダヤ人にとって、ロシア系ユダヤ人は（開封のユダヤ人を別にすれば）上海で出会った最初の他のユダヤ人グループであり、言語も文化も宗教的習慣も異なっていた。その経験をした後でドイツ系ユダヤ人が到着した。彼らはセファルディ系ユダヤ人が支持するイギリスの敵国であるナチスドイツで迫害されたユダヤ人だった。またイギリスへの文化変容を進めたセファルディ系ユダヤ人にとってドイツ系ユダヤ人は同様に西欧的であり、ロシア系ユダヤ人やポーランド系ユダヤ人よりも文化的に近い存在でもあった。さらに上海へのドイツ系ユダヤ人の流入が急激かつ大量であったこと、ポーランド系ユダヤ人が到着した時はアメリカのユダヤ人組織からの援助など支援体制がすでにある程度整っていたことなどの事情もある。

## 結 論

20世紀に入り上海のセファルディ系ユダヤ人の状況は大きく変化した。19世紀は主にアヘン貿易に携わる両Sassoon商会の比較的若い従業員が少数（1895年に全体で175人）いて、商会が族長的に彼らの面倒を見ていたのに対し、20世紀は彼らが商会から独立して事業を始め、その分野も貿易業に止まらず各種商業・工業・不動産業・公益事業など現地定着型となり、人口は800人にまで増大し、上海ユダヤ人コミュニティ協会（1909）が設立された。

上海のセファルディ系ユダヤ人には「バグダッド出身」と「ユダヤ人」という2つの同一性が認められる。彼らは祖国を持たないユダヤ人であるゆえ、租界を作ったイギリス人以上に租界の発展に意を用い、租界での安定した地位を維持するための後ろ盾を求めてイギリスへの文化変容を進めた。その一方で他のユダヤ人グループへの連帯（開封のユダヤ人コミュニティ再興の試み、迫害を逃れて来たロシア系・ドイツ系・ポーランド系ユダヤ人への援助活動）およびシオニズムへの（少なくとも限定的）支持の姿勢が生まれた。そしてこのような他のユダヤ人グループとの接触は、イギリスへの文化変容により薄れかけていたバグダッド出身という自らの地縁的・血縁的同一性を改めて意識させると同時に、他のユダヤ人グループに対する優越意識と隔離につながった。一方、バグダッド以来の族長主義と孤立的個人主義はコミュニティの健全な発展の妨げになった。

イギリスへの文化変容はバグダッド出身という同一性を喪失する危険性を伴い、それは彼らが祖国を持たないユダヤ人ゆえに、またユダヤ人の宿命である社会における少数派コミュニティなるがゆえに重大な問題だった。中国ユダヤ人救援協会（1900）や上海シオニスト協会（1903）の設立の後、上海ユダヤ人コミュニティ協会（1909）が設立されたのも単なる偶然や人口増加のためだけでなく、彼らが同一性を基盤としたコミュニティの重要性を理解するようになったからであろう。この点においてユダヤ教はコミュニティの同一性を守るために大きな役割を果たした。

## 注

1. イギリスとはさらに虎門寨追加条約（1843）、アメリカとは望厦条約（1844）、フランスとは黄埔条約（1844）が結ばれた。
2. Astrid Freyesein: „Shanghai und die Politik des Dritten Reiches“. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2000. S. 20.バグダッド出身のユダヤ人たちが500~700人だった第1次世界大戦以前では、1910年の上海の総人口は130万人弱、共同租界・フランス租界の人口が16万人強、外国人人口が1万5000人だった。高橋孝助・古厩忠夫『上海史』、東方書店、1995年、21-22頁。日本人は当時7000人以上で上海在住外国人の半数を占め、1915年には共同租界だけで

- 見ても、イギリス人を抜き外国人居留民の最大勢力になった。『上海史』, 99頁。副島圓照『戦前期中国在留日本人人口統計 (稿)』, 和歌山大学教育学部紀要, 1984年, 24頁。
3. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976). S. 45.
  4. Joan G. Roland: „Baghdadi Jews in India and China in the Nineteenth Century: A Comparison of Economic Roles“. In „The Jews of China“. Vol. 1. Ed. by Jonathan Goldstein. New York (M. E. Sharpe) 1999. S. 141.
  5. Maisie Meyer: „The Sephardi Jewish Community of Shanghai and the Question of Identity“. In „From Kaifeng ... to Shanghai. Jews in China“. Ed. by Roman Malek. Nettetal (Steyler Verlag) 2000. S. 345-346.
  6. ペルシアのゾロアスター教徒がイスラム教への改宗を嫌い、インドのボンベイへ逃げたもの。現在も存在するTata財閥はパルシー教徒の家系であり、当時バグダッド出身のユダヤ人たちの競争相手だった。
  7. 共同租界の共通語は英語だった。外国人が接するほとんど唯一の中国人である召使や従業員、買弁はピジン英語を話した。
  8. 佐藤唯行『英国ユダヤ人、共生をめざした流転の民の苦闘』, 講談社, 1995年, 157-171頁。
  9. ハリエット・サージェント, 浅沼昭子訳『上海, 魔都100年の興亡』, 新潮社, 1996年, 192頁。
  10. 同上, 193頁。
  11. イギリスでは18世紀後半にはユダヤ人が市民的権利を獲得し、1858年のユダヤ人解放法の成立によりユダヤ教徒が国会議員に選出されるようになるなど、政治面での差別も19世紀中には廃止された。佐藤唯行『英国ユダヤ人、共生をめざした流転の民の苦闘』, 214-216頁。
  12. Rena Krasno: „Strangers Always—A Jewish Family in Wartime Shanghai“. Berkeley (Pacific View Press) 1992. S. 65.
  13. 東洋最大のOhel Rachelシナゴーク (1920年) はSir Jacob Elias Sassoonの遺産により、彼の妻を記念して建てられた。ビザンチン風のBeth Aharonシナゴーク (1927年) はSilas Aaron Hardoonの寄付による。
  14. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 50.
  15. Maisie Meyer: „The Sephardi Jewish Community of Shanghai and the Question of Identity“. S. 360.この遺言は6年に及ぶ裁判を引き起こした。Hardoonはイラク国籍であったため (イギリス国籍を取得したという資料もある), その遺産相続にはイラクの法律が適用されるべきだと従兄弟の1人が訴えた。イラクの法律では遺産の4分の1が妻に、残りは血縁者に分配されるが、オスマン帝国時代にイラクを離れ、イギリス主導下の上海共同租界で財を成したHardoonに近代国家イラクの法律が適用されるのか、中国における外国人の権利とは何かなど国際法の諸問題点が提起されることになった。ハリエット・サージェント, 浅沼昭子訳『上海, 魔都100年の興亡』, 190頁。
  16. バグダッド出身のユダヤ人はユダヤの古い伝統に従い、死者を経かたびらで覆うだけで埋葬し、ロシア系ユダヤ人はヨーロッパの習慣を取り入れ、棺に入れて埋葬していた。両コミュニティの交渉の結果、2つの埋葬委員会が組織され、葬儀を監督することになり、Baikal Road墓地は別々の入り口がある2つの区域に分けられた。Rena Krasno: „Strangers

- Always—A Jewish Family in Wartime Shanghai“. S. 38.ロスによれば他にPoint Roadにもユダヤ人墓地が存在したという。James R. Ross: „Escape to Shanghai—A Jewish community in China“. New York (The Free Press) 1994. S. 260.
17. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 73.
  18. 大崎雄二『中国とユダヤ—その歴史と現在』, 高橋吉文編『東西のユダヤ人』, 北海道大学言語文化部, 1998年, 73-74頁。The Jewish Community of Shanghai: „Directory & Guide to Jewish Shanghai“. Shanghai 2000. S. 20.
  19. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 53.すでに1850年にSassoon商会のYitzhak Farajが開封のユダヤ人に宛ててヘブライ語の手紙を送っている。潘光編『犹太人在中国』, 北京(五洲传播出版社), 2001年, 18頁。
  20. 彼はMessrs. E. D. Sassoon and Co.で働いていた。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 53.
  21. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 54-55.開封のユダヤ人社会への救援活動について詳しくは丸山直起「中国のユダヤ人社会とシオニスト運動」, 『商学討究』第33巻第2・3合併号, 1982年, 小樽商科大学, 214-219頁。
  22. James R. Ross: „Escape to Shanghai—A Jewish community in China“. S. 55. イエメンのセファルディ系とバグダッドのセファルディ系間の結婚ですらひんしゅくを買ったという。
  23. 丸山直起, 同上, 221-222頁。
  24. 丸山直起「バルフォア宣言と日本」, 『一橋論叢』第90巻第1号, 1983年, 一橋大学一橋学会, 88頁。
  25. Maisie Meyer: „The Sephardi Jewish Community of Shanghai and the Question of Identity“. S. 372.
  26. 同上, S. 370-372.
  27. この経緯については拙稿「戦前の日本における対ユダヤ人政策の転回点」, 『言語文化論究』(16) 2002年, 九州大学大学院言語文化研究院, 1-14頁を参照されたい。

#### 参考文献

- David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews—The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976).
- 丸山直起「中国のユダヤ人社会とシオニスト運動」, 『商学討究』第33巻第2・3合併号, 1982年, 小樽商科大学。
- 「バルフォア宣言と日本」, 『一橋論叢』第90巻第1号, 1983年, 一橋大学一橋学会。
- ハリエット・サージェント, 浅沼昭子訳『上海, 魔都100年の興亡』, 新潮社, 1996年。(Harriet Sergeant: „Shanghai“. London (Jonathan Cape) 1991.)
- Rena Krasno: „Etrangers Always—A Jewish Family in Wartime Shanghai“. Berkeley (Pacific View Press) 1992.
- James R. Ross: „Escape to Shanghai—A Jewish community in China“. New York (The Free Press) 1994.

- 佐藤唯行『英国ユダヤ人、共生をめざした流転の民の苦闘』、講談社、1995年。
- 秦惟人『サッスーン財閥ーアヘン王から不動産大王に』、日本上海史研究会編『上海人物誌』、東方書店、1997年。
- 大崎雄二『中国とユダヤーその歴史と現在』、高橋吉文編『東西のユダヤ人』、北海道大学言語文化部、1998年。
- Joan G. Roland: „Baghdadi Jews in India and China in the Nineteenth Century: A Comparison of Economic Roles“. In „The Jews of China“. Vol. 1. Ed. by Jonathan Goldstein. New York (M. E. Sharpe) 1999.
- Maisie Meyer: „The Sephardi Jewish Community of Shanghai and the Question of Identity“. In „From Kaifeng ... to Shanghai. Jews in China“. Ed. by Roman Malek. Nettetal (Steyler Verlag) 2000.
- The Jewish Community of Shanghai: „Directory & Guide to Jewish Shanghai“. Shanghai 2000.
- 潘光編『犹太人在中国』、北京（五洲传播出版社）、2001年。

## Sephardim in Shanghai

Yoshio ABE

In Shanghai bildete sich nach dem Opiumkrieg (1840-42) eine kleine Gemeinde von Bagdader Juden, die bis zur Gründung der Volksrepublik China im Jahre 1949 bestand. Diese Juden waren in den dreißiger Jahren des 19. Jahrhunderts vor den Verfolgungen im Osmanischen Reiche geflohen und zunächst in die unter englischer Herrschaft stehenden indischen Städte Bombay und Kalkutta übersiedelt. Nach dem Opiumkrieg stiegen sie in Shanghai in den Opiumhandel ein und erzielten damit bis zum Ende des 19. Jahrhunderts hohe Gewinne. Im 20. Jahrhundert investierten sie ihr Kapital in den Immobilienhandel, in die Industrie und in gemeinnützige Unternehmen und einige von ihnen machten damit legendäre Gewinne.

Die Zahl der in Shanghai lebenden Bagdader Juden betrug gegen Ende des 19. Jahrhunderts 175 und wuchs danach in der Zeit bis zum Ersten Weltkrieg auf ca. 800. Im Jahre 1909 gründeten diese Juden die Shanghai Jewish Communal Association. Dieser Verein stellte armen Juden koscheres Essen, Ausbildungsmöglichkeiten und medizinische Versorgung zur Verfügung.

Die Gemeinde der Bagdader Juden legte größten Wert auf gute Beziehungen zu den Engländern, die in Shanghai, genauer gesagt in der internationalen Niederlassung, die politische Führung innehatten. Sehr reiche Juden erworben auch die englische Staatsangehörigkeit. Um als Europäer angesehen zu werden, bezeichneten sie sich in Shanghai als „Sephardim“, ein Begriff, der ursprünglich den Juden aus Spanien und Portugal galt.

Trotz ihrer kulturellen Anpassung an die englische Gesellschaft, bemühten sie sich ihre Identität als Bagdader Juden beizubehalten, was für sie als Minderheit innerhalb der Ausländergesellschaft in der chinesischen Großstadt Shanghai unentbehrlich war.

Außerdem zeigten sie große Solidarität mit ihren Glaubensbrüdern. Sie versuchten die damals vom Aussterben bedrohte Judengemeinde in Kaifeng zu retten. Sie unterstützten auch die eben entstandene Zionismusbewegung mit politischen, aber noch mehr mit finanziellen Mitteln. Und in Shanghai halfen sie 22.000 jüdischen Flüchtlingen aus Russland, Deutschland, Österreich und Polen.